



## サイエンス コンピューター・分離技術・科学

常務取締役  
スペシャリティ事業部長

山口敏明

化学技術賞が、タイミングよく頂戴出来た。誠に目出たく、有難いことである。直接受賞の榮に浴した人達は勿論、科学計測事業に携わるメンバー全員の喜びであり、大なる励みとなった。改めて祝意を表すると共に、開発当初より現在に至るまでの御苦勞、努力に対し、心からの敬意と謝意を呈したい。

受賞記念特集号なので、科学計測事業の展望と、ゲル、ハード開発への一層の期待などを述べたいが、字数の制約があるようなので、それは別の機会に譲らざるを得ない。よって今回は、液体クロマトグラフィーを出発点とする研究開発についての、私の“想い”を書き連ねることにした。

企業の将来を左右する大きな条件の一つに、コンピューターの問題がある。OAやプロセスコントロールなどは、大切であるが、これは最早常識である。80年代では、コンピューター化された商品を、プロダクト・ラインに持つことこそが、肝要であると言われている。コンピューター化された商品、換言すれば、コンピューターのソフト・ウェアや、システムを内包する製品を持つということは、ソフト・ウェアの自己開発力を保持していることを意味する。この開発力が欠除した企業に、未来はないと言うのだ。

幸いにも、我が社では科学計測開発部の中に、ソフト・ウェア開発力が根付き、育ちつつある。この大事な若芽を如何に早く強く育てるか。世の中の激しい進歩に遅れないよう伸ばすか。優れて経営的な課題であり、私の責任でもある。と云って、大した方策がある筈もない。大方の理解、協力、そして教示を請うものである。

“分離・分取、分離・分画、分離・吸着”と並べれば、東曹マンなら直ちに、ゲル、限外濾過膜、ゼオライト、が浮かぶ筈である。分離“材”のレパートリーは多く、性能も最高水準にある。だが分離“技術”となると、液クロだけというのは、言い過ぎであろうか。膜、ゼオライトの機能を活かす分離技術、アプリケーションは、未だしである。それでも、それだから、私は“総合分離技術の東曹”というスローガンを打ち樹てたい。素人の粗笨な掛け声だけではどうにもならないことは承知している。速やかな、“分離技術シンポジウム”開催を提唱する所以である。

「ノーベル化学賞も産業界から」、「近年、化学における最も顕著な変化は、測定機器の進歩と、コンピューターの発達である」、ノーベル賞受賞福井教授の言葉である。

福井語録の中から、気に入ったフレーズを取出し、恣意的解釈を加えて見た。

“日本の産業も基礎的研究指向の心要が生じた。科学と技術は一方通行でなく、可逆的でもある。拡大するべき学際領域を結ぶ、基礎の学問分野に有機化学がある。化学が、量より質の化学を目指すことにより、真の革新技術が生まれる。そのための武器が、コンピューターと、測定機器である。”と言ったことになる。

ここから私の夢が広がる。科学の進歩に貢献する HLC、分離技術からサイエンスを切り開く、応用を窮める東曹は、基礎にも強くなる……………。

今回の化学技術賞受賞、それが何時の日か、ノーベル化学賞にも繋がる、“進路”を示唆しているというのは、私の妄想であろうか。

※「科学と人間を語る」福井謙一、江崎玲於奈、共同通信社刊